



農村生活のすすめ

第2回：「人間」と「環境」についてのすこし長いコラム

調査研究部 川井 真

1. 環境に調和しながら生きる

自宅の小さな花壇では、ツルバラやクレマチス、マンデビラやノウゼンカズラといったツル性の植物が開花している。箱庭のようなささやかな自然である。他の植物に比べるとツル植物の運動は活発だ。茎を支柱に巻きつけながら登っていくものがあれば、左右に伸びた葉を器用に操ってフェンスにつかまっているものもある。あるいは、まるで乳児がリーチングをするかのように、触手のようなまきひげを風に揺らして周囲を探っているものもある。いずれも数時間でその姿を変えていく。そんな光景を眺めていて、ふと、以前に読んだチャールズ・ダーウィンの『よじのぼり植物』を思い出した。この著書のなかでダーウィンは、「漠然とではあるが動物と植物は運動能力の有無という点で区別できるとよく言われている。しかし、むしろこれは、植物は地面に固定されており、栄養分は風と雨で運ばれてくるので、運動するのは比較的まれなことで、植物にとって運動することが何か利益になるときでなければ発現しないというべきであろう」と語っている。そう、運動には意味があり、また多様性がある。そして植物も人間も「運動すること」の前提には“環境に調和しながら生きる”という本能がある。

2. 環境と意識

古来、人間もまた環境に適応しながら生き

てきた。環境とは、それを構成する諸部分が統合された形状・形態すなわちゲシュタルトであるがゆえに、不確定で不確実な要素を多分に内包している。したがって環境に出現する予測不可能な変化は人間の知覚や認知機能を一時的に混乱させることになるのだが、人間は——環境にみずからを適合させるため——変化を組み込んだゲシュタルトを再構成し、そこに意味や価値を付与してきた。それは外的な原理によるのではなく、一次的には変化への反射的な対応であり、しだいに変化を組み込んだゲシュタルトに順応するようになり、そして最終的に新しいゲシュタルトを心的システムの内部に取り込みながら自分で自分をつくり変えていく、という自己生産的な経過をたどるものと考えられる。たとえば産業構造の変化と所得の増大、さらには都市化という現象も、予測不可能な環境変化であったといえるのだろう。わたしたちは経済的に豊かで利便性の高い暮らしと過剰なほどのサービスが提供される社会に見事に順応したことで、気がつけば花壇の植物のように、生存に必要な栄養分はどこからともなく風や雨に乗って運ばれてくるだろうといった、どこか依存的で傍観者的な感覚に陥りがちである。もちろん幻想にすぎないのだが、人間の心的システムが新たに出現した環境を受け入れるために意味や価値を付与しているのだとすれば、わたしたちは運動することが必ずしも人

間に利益をもたらすことのない時代を生きている、いや、つくり出そうとしているのかもしれない。しかし、これから訪れる環境変化に人間はどのように適合していくのか。目前に迫りつつある少子高齢・人口減少社会が21世紀に特徴的な環境変化であることに疑いはないのだから、そろそろ自分自身の生き方を見つめ直してみることも必要ではないだろうか。まさに人間という生物の運動能力が試されるときであり、とりわけ日本では、人間の有する豊かな想像力が問われることになるのではないかと考えている。

3. 人間の潜在能力

そこで少し視点を変えてみよう。2005年に人間とチンパンジーのDNA解析が終了し、驚いたことに塩基配列は98.8%が同じであることが分かった。さらに、ルーツをたどると両者は同じ祖先を持つらしい。それでは人間とチンパンジーを分ける1.2%とは何なのか。身体能力は断然チンパンジーのほうが優勢であり、記号などを瞬時に記憶する直観像記憶(映像記憶)もチンパンジーのほうが勝っているとのことである。このように比較すると生物としての人間の優位性が見つからない。この問題に対する回答としては、一般的には言語の発達とコミュニケーション能力の進化に人間としての優位性があるという意見が有力だが、これに加えて、個人的には人間特有の情緒や感性、そして豊かな想像力に鍵があるのではないかと感じている。たとえば人間は月をながめて物語を描き、音楽を奏でる。そこに多くの共感や感動が生まれる。またユーレイ・ガガーリンが「地球は青かった」というメッセージを発する遙か昔から、「あそこに行ってみよう」という知的好奇心を抱いた人

たちがいる。それが人類進化の源になっているのではないかと思うのである。すなわち知的好奇心を掻き立てる要素はつねに環境のなかに存在していて、人間にはそれを感じ取る能力があり、それこそが人類進化の底流をなしていると考えてもいいのではないだろうか。感性を磨いて耳を澄ませば、環境はつねに人間に何かをアフォード(提供)していることがわかる。

4. 経済性と社会性

ヒトゲノムに関する話題は、ある式典の会場で寺島実郎さんから伺ったことがある。寺島さんはTBSテレビの番組審議委員会の委員をされているのだが、その委員会でスペシャル番組『人間とは何だ…!?!』が取り上げられ、その感想を語られたときのことである。式典会場での話題は「働くことについて」というものであったが、人間は賢いサルになれるのかというテーマから話が展開したように記憶している。じつは、この話題で寺島さんからとても興味深い意見を伺うことができた。「働く」という人間の運動には「カセギ」と「ツトメ」という二つの要素が内包されていて、「カセギ」は経済的自立を、「ツトメ」は社会参画や社会貢献を意味するというのだ。人間はこのバランスが取れてはじめて大人になれるし、満たされた人生を送ることができる、ご自身の経験を踏まえて話されていた。このお話を聞いていて、寺島さんが言語化した「カセギ」と「ツトメ」という言葉が、自分のなかでモヤモヤしていた「自立」と「自律」というテーマに見事に重なり、まるで霧が晴れるように頭が整理されていったことを憶えている。なるほど、この人は同じことを語っている。「自立」とは主として経済

的自立を指す。これは他者に依存することなく自分で飯を食っていくことである。一方、「自律」とは合理と不合理をみずから判断して行動できる理性的規則を自己のなかに持つということであり、それは他者との関係を意味し、世の中が見えているということ、あるいは隣人の顔が見えているということでもある。すなわち「自立」はいたって個人的であるが、「自律」は社会性を帯びた意味領域のなかにある。

5. 自律すること

古来、人間社会は階層的であるから格差が生じること自体は悪いことではない。きわめて自然な現象であるといってもいい。ただ、この構造を社会が受け入れるのは、階層間における「自立」と「自律」のバランスがとれている場合に限る、という条件が付くからではないだろうか。残念ながら、現代社会はこのバランスが崩れかけているように思える。中間層を形成する多くのサラリーパーソンは、経済的自立という意味においてほぼ安定しているが、多くの人たちは「自立」と「自律」を混同しているように思える。社会的な階層が一段上がれば経済力や発言力が増して公認された社会的地位というものが得られるが、ここにはより高い責任や義務が随伴してくる。すなわち「自律」の度合いも高めなければならないということである。しかし経済的自立を果たした人たちの多くは、責任や義務の意識はそのままに、「自立」の段階だけを一段上がってしまったのではないだろうか。幸運にも現代的な社会システムに組み込まれて経済的自立を体感した人たちは、社会的弱者や貧困にあえぐ人たちを蔑んでみたり、もしくは無関心を装ったりする傾向があるが、

一皮むけば自分も彼らとなんら変わらない弱々しい個人であるということを忘れている。はだかにされたらチンパンジーよりも生存能力は劣るのだから、もう少し謙虚に社会と向き合うべきではないかとも思う。もちろん自分自身もサラリーパーソンの一人として、つねに内省している。高所得と社会的地位が得られても、責任や義務や役割認識などは下層領域に固定化してしまうような社会では、根の深い不信感や対立構造のようなものを、所得格差や生活格差のなかにつくり出してしまいう危険がある。この事態を回避するためにも、個々人は「自律」して自分の「ツトメ」を認識する必要がある。そして、人間が「自律」するためには、このような全体的社会事象を「間主観的」に感じ取ることができる豊かな“関係性”の存在が欠かせない。

6. 人間と社会

人間にとっての環境といった場合、それは自然環境だけではなく人間関係も含まれる。すこしイメージが拡散してしまうが社会環境と言い直したほうが適切かもしれない。ひとことで社会といっても、そこには2つの意味が含まれているように思う。社会という言葉の起源を探しに行くと古代ギリシャの哲学者アリストテレスに出会うことになる。たとえば、アリストテレスが書きためた論考を息子のニコマコスらが編纂した『ニコマコス倫理学』のなかには、「人間とは社会的存在であるから、人間は他者とともに生きる自然の本性を持っている」といったことが記されているが、ひとつはこれに依拠するもので、家族や友人、職場の同僚など、特定の地域や労働の場において協同して生活を営む者同士が、お互いの存在の意味や価値を確認しあい、自助

と互惠によって形成される空間である。もうひとつは、19世紀から20世紀にかけて支配的なイデオロギーとなるナショナリズムを背景に、そのフレームワークを刻印するために必要となった国民国家という存在で、国、都道府県、そして市区町村という行政単位に機械的に細分化した——中央集権的なヒエラルキー構造をもつ——巨大な空間である。現代人の感覚では、社会という言葉の意味はおもに後者を指すことが多いのではないかと思う。ただ、国家は“環境としての社会”を認識するには大きすぎる。個人的な印象としては、ぬくもりが届く範囲もしくは顔の見える範囲を基本として、町内会ほどの空間が“環境としての社会”の核になっているのではないかと感じている。小学校区や中学校区という表現もあるが、暮らしを足元で支えている空間は意外に狭いかもしれない。この小さくまとまった“環境としての社会”の集合体が国家であり、そのような理解が、とりわけ日本的であるように思える。

7. QODという選択

それではもう一度、社会的変化という観点から現代社会を眺めてみよう。QODという言葉をご存じだろうか。老年学や死生学を中心に一般化しはじめた用語である。QODとはクオリティ・オブ・デス（死の質）の略で、クオリティ・オブ・ライフ（生活の質：QOL）に死生観を組み込んだ概念といってもいい。高度成長の初期段階に構成された多産少死社会は、その後の少産少死社会を経て、現在は少産多死社会へと移行している。それにより人口構造におけるマジョリティも、ニューファミリーを中心とする生産年齢ゾーンから65歳以上の老年ゾーンへと移行し、現在、人口

ピラミッドはきれいな逆三角形を形成しはじめている。まさに高齢社会とは多死社会を意味しているということなのである。振り返れば、人間の死亡率は100%であるにもかかわらず、“死が遠くにある時代”は死を隠ぺいすることに懸命になっていた。しかし国民の大多数が高齢者になるのであれば、死というものと真摯に向き合い、死の質を高めることで生の質も高めていこう、という考え方に変わるのはとても自然なことであろう。千葉大学法経学部教授の広井良典さんは『死生学 [1] 死生学とは何か』第6章：生と死の時間（深層の時間）への旅のなかで、死生観とは「あえて簡潔に言えば、宇宙や生命体の大きな流れの中で、自分の生や死がどのような位置にあり、またどういう意味をもっているかについての理解や考え」であると定義したうえで、現在の日本では、「死ということの意味がよく見えないと同時に、生それ自体の意味もよく見えない」いわゆる“死生観の空洞化”状況にあると語っているが、まさにその通りだと思う。死を忌み嫌う社会から死を受け入れることで生の意味を考える社会への移行は、疑いなくダイナミックな環境変化であるといえるし、また、それがまっとうな社会のあり方であり人間の感覚なのだと思う。人生のラストステージに立って最期になにを演じるのか、死を身近に感じるができるからこそ、残された生の時間がいかに貴重なものであるかを知り、意識を飛躍させることができるのである。人間もまた他の動植物と同じように限られた生の時間を生きているのだから、QODという思想を自分の環境のなかに取り込むことの意味を、あらためて一人ひとりが考えてみることは大切なことではないだろうか。

8. 豊かに生きる環境を求めて

意を決して庭に花壇を作ってから、起床時間を1時間繰り上げて、夏場は午前5時前にはベッドから這い出して水やりをしている。ちっぽけな草木の詰まった猫の額ほどの花壇だが、そこにいる植物たちがわたしの水やりという運動を必要としているからだ。気がつけばわたしは彼らの環境の一部になっていた。しかし一方通行ではない。彼らもささやかではあるが精一杯のお返しをしてくれる。おかげで近所にご高齢の友人も増えた。いまではこの小さな花壇を核にわたしの環境が構成されている。互いの環境は入れ子状態となって、共鳴し合っているのである。人間には多様な生物あるいは生命と共鳴できる環境が必要なのだと思う。都会暮らしをしていると忘れがちになるが、それはたぶん、そもそも都市という場所が生命を産み出し育むところではないからなのだろう。「死生観の空洞化」もこのような環境に人間が適合した結果として生じたことなのかもしれない。したがって都市生活者には自分の環境の内部に自然を組み込むことが必要なのではないだろうか。それにより人間と人間、人間と自然が、相互にアフォーダンスの関係で存在させられていることをあらためて知ることができる。少なくとも「生存に必要な栄養分はどこからともなく風や雨に乗って運ばれてくる」といった錯覚に陥ることはない。また、これまで気づかなかった隣人の存在にも気づくだろう。

一方、新たな環境を求めて都会を離れる人たちもいる。高度成長期に多くの文豪や文化人たちが、本郷や谷中のような下町や世田谷の一角などに移り住んで変容する社会の動きを捉えようとしたように、昨今、このようなフリーランサーたちが農村に移住する姿が散

見される。情緒豊かな人たちは風の流れをつかむ感性も持っているので、高齢社会という環境変化によって豊かさの本源が都市から農村に移行していることを感じ取っているのかもしれない。人間は植物とは違って大地に固定されているわけではないので、自分にふさわしい環境を求めて“移動する”という運動を選択することができる。なによりも、場所を選ばず収入を得る術を持っている人たちにためらいはない。情報通信技術の進展がその行動を後押ししている。彼らは環境変化を先取りしながら、手探りで自分を取り巻くゲシュタルトを再構築しようとしているのではないだろうか。たしかに冒険だが、人間は元来リスクテイカーである。人間らしく生きる環境を求めて農山村を訪れる人々の数は、これからも増加していくことだろう。

(参考文献)

- ・チャールズ・ダーウィン 著、渡辺仁 訳 (1991)『よじのぼり植物—その運動と習性』森北出版
- ・佐々木正人 著 (1994)『アフォーダンス—新しい認知の理論』岩波書店
- ・アリストテレス 著、高田三郎 訳 (1971・1973)『ニコマコス倫理学 (上)・(下)』岩波書店
- ・アントニオ・R・ダマシオ 著、田中三彦 訳 (2005)『感じる脳 情動と感情の脳科学よみがえるスピノザ』ダイヤモンド社
- ・島蘭進・竹内整一 編集 (2008)『死生学 [1] 死生学とは何か』東京大学出版会